

オランダ軍を描き出したジャワ更紗(H 185615)



モノグラフィ

モノに刻まれた 出会いの記憶 —特別展「アジアとヨーロッパ の肖像」の展示学

吉田 憲司 (よしだけんじ)
本館文化資源研究センター

のそれぞれの伝統に基づいて、自らの文化に属する人物を描いた「肖像」に目を向け、いわば「自己像」の描き方を確認した後、緩やかな時間軸に沿って、アジアとヨーロッパのあいだでのさまざまなやり取りの軌跡をたどっていく。両者の直接の接触以前、お互いのあいだには、想像的要素の強い他者像が流布していた(第二章「接触以前—想像された他者」)。そうした想像的要素は、接触後も根強く生き続けていく。もちろん、アジアとヨーロッパの直接の出会いには、必ずしも常に対等のものであったわけではない。そうした出会いのあり方の諸相が、遺されたさまざまな造形に刻み込まれている(第三章「接触以降—自己の手法で描く」)。

ありかたを問いかける作品を集めることにした。そこには、先鋭的な現代美術の作家たちの、さまざまな挑戦が展開する。それらの作品は、今回の展示全体とともに、「はたしてわたしたちは、他者(ひと)と自己(わたし)を、本当により深く理解できるようになったのか?」という問いを、改めてわたしたちに投げかけている。

(特別展「アジアとヨーロッパの肖像」の会期は、二〇〇八年九月一日から一月二五日。民博特別展示館にて開催)



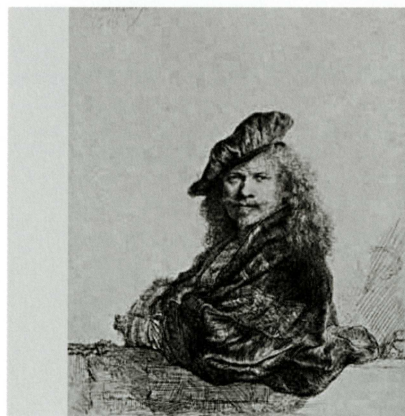
「南蛮人來朝図屏風」
安土桃山時代 16-17世紀
紙本金地着色/六曲一双
(国立歴史民俗博物館蔵)

「アジアとヨーロッパの肖像」と題した今回の特別展は、アジアとヨーロッパの人びとが、自らをどのようにとらえ、お互いをどのように受け入れてきたのか。その認識のうつりかわりを、広い意味での「肖像」、つまり肖像画や彫刻、生活用品、写真、映像など、人体表現ともなうさまざまな造形のなかにたどろうとするものである。

「肖像」を取り上げたのは、ほかでもない。それが、わたしたちの人(ひと)に対する認識を、もっとも直接的にあらわすものだからである。巨匠と言われた作家たちの作品のなかに、南蛮屏風やオランダ東インド会社の記録のなかに、マイセンや古伊万里の磁器のなかに、あるいは現代美術の作家たちの挑戦のなかに、アジアとヨーロッパにまたがる、人と人の出会いの記憶と、人が人に投げかけるまなざしのあとが浮かびあがる。「ひと」を描くことは、じつは「自分」を語ることもあったようだ。

では神奈川県立歴史博物館(横浜)と神奈川県立近代美術館(葉山)という博物館と美術館の二会場で、同時期に同じタイトルのもとで開催することとしている。展示は、その後、さらにアジアとヨーロッパの五カ国を巡回する予定である。博物館と美術館、アジアとヨーロッパの垣根を超えた共同によって、これまでとちがった世界が見えてくるにちがいない。

今回の展示は、五つの「章」から構成される。まず、第一章「それぞれの肖像」で、アジアとヨーロッパの接触以前から



「自画像」
レンブラント・ファン・レイン
1639年 エッチング・紙
(大英博物館蔵)



「ムーラン・ルージュ、ラ・グーリュ」
アンリ・ド・トゥールーズ=ロートレック
1891年 リトグラフ・紙
(サントリーミュージアム[天保山]蔵)



「水玉ドレスの女性」
ハン・ジン/ジン画室
1920-1930年代 オフセット・紙
(福岡アジア美術館蔵)



「童女図(麗子立像)」
岸田劉生
1923年 油彩・カンバス
(神奈川県立近代美術館蔵)